



峴 峴

釋迦如來梅檀瑞像

三國
傳素記

全

千厓文庫
文庫24
A692





釋迦如來梅檀瑞像記



南瞻部州大日本山城國嵯峨五臺山清涼教寺本尊釋迦
 如來梅檀乃瑞像の常途に本像より異なり生身の如來
 値奉ら思ひを作とぐ其所に釋尊摩竭陀國
 中にて三十歳にして成道して後淨母摩耶夫人乃淨
 ゐる祇園精舎より初利天より昇ると善法堂の金石れ
 して結跏趺座して夏九旬の間報恩の淨乃小摩訶摩
 耶大報恩法を説く諸天乃得益無量無邊なり此時
 人間に於て西部の弟子如來弘見奉らざる事譬は星乃
 中に月かりたりゆくて皆愁し沈む事父母離るるが如く
 時、拔嗟困のあり優填大王を慕渴作の餘り國中の巧匠と

乃く彌檀香木を以て如來の形像を作す。其の形像の工
 匠も白て言く我等佛の小分乃相好を以て模し奉るべし。光明
 威徳を以て衆の模し奉るべし。其の時毘首羯磨天則其
 身と交りて一人の工に成王に言く。此の世の工の中に最よ
 大王の形像を作奉ると。以て四王大に喜して。其の
 香木を以て荷負して以て天に上りて。其の善哉仁者
 此香木を以て我の形像を作す。其の容色を以て奉るべし。也
 乃く天に上りて。執く香木を以て。其の音三十三天に通じて
 佛の今在る所の佛力と以て。音の所を以て。衆生同者
 を以て。罪垢煩惱悉く消滅せし。然而日なれば。端嚴
 微妙の佛像。成りて。此の世に王淨信と生じて。柔順忍の徳と

得て。乃く加之一切衆生。以て。不肖の業障。皆消滅する事
 あり。其の日の之の雲霧と晴まが。如と阿含經。并造像功德
 經。に説く。いけが

○尔時世尊。初利天の衆會。以て告諸。乃く今七日。以て過て。其
 乃く。阿含地。里僧伽尸。圓大池水。の側。下りて。佛の形像。と
 其の。帝釈自在天子。以て告く。曰。須弥山の頂より。佛伽尸。圓乃
 池水の。乃く。至る。乃く。金銀水精の。三階。階を作し。佛則金
 の階より。下りて。佛の優填王の。新に造る。乃く。佛の形像。親世尊の
 降る。乃く。階の。下りて。佛の。乃く。時。乃く。世尊。長跪合掌。して。其像
 に向ひ。佛の。乃く。虚空の中に。百千。乃く。化佛。在り。又。乃く。皆合掌。して。其像
 に向ひ。佛の。乃く。頂と摩して。記を授て。乃く。其の。乃く。我滅後。一

千年に法の芽子号弘みくはは附屬とて何し優填大王佛の白
 て言く佛の滅後ハ佛像と造り者縁の功德を得乎佛の言く
 佛眼を以て觀るに佛像と造る者ハ皆十方の佛を一生
 以て阿含經又ハ觀佛三昧經或ハ造像功德經等乃意かり
 何よ世尊も瑞像も二も共ハ祇園精舎に在りんとてのうま
 瑞像也多ふ白く言く前ハ進く精舎に入らば下とせざる
 又像も諸く言く昔々我化縁ハ之の如くて必涅槃も
 入るに汝ハ世間ハ在る衆生の利益久くうんと同善再之
 住波と遂るに瑞像乃前ハ別まて本座に歸り又家に
 於て二も兩色も移り精舎の内を相去幸二十歩
 かり優填王歡喜し終り事極りねとてり

○彼如来彫刻ありてより以来年刻を授まらぬ如來の姫周第
 四の帝昭王廿四年甲寅四月八日に降誕あり同第五の帝穆
 王十二年庚寅の四月如來三十七歳の沙時一統辛卯 母摩耶 三十八歳
 夫人ハ沙時乃ハ切利天ノ界に給り此歲神々優填王六の瑞
 像を造ら然しより以来西晋第四の帝愍帝建興四年丙子
 に至る一千二百七年の星雲を經りて多小國王あり并合
 蜜多と名づく佛はを破滅して此如来像とも共ハ奉んと擬
 と時ハ梵土あり姓ハ鳩摩名ハ羅琰といつり高涼提婆第一の
 如来像已ハ滅し給り奉ら悲しく亦出家遁世して此瑞像を
 持して東の方震且ハ行人と欲と畫ハ則羅琰は師瑞像
 を負たり夜ハ又如来像羅琰を負給り放り道陰那と經り

之也... 東天竺の東真丹の境なり龜茲
國を請来とて此の國を白純王と喜く是像并に羅漢と請
し留し宮内にも置く供奉し後入るは西蕃乃二十
餘國と化して歸し身代りてすれ

○彼陽像震且は光降し後(ふ)根本に東晋第九帝孝武
帝太元二年丁丑に即前秦の苻堅に建元十三年丁丑に當
ふ此年正月は大使ありて奏して曰星あり外國の分野
之の正に大徳の育人ありて中國に入ると苻堅のいり朕
聞く西域に羅什は呼とて聖人ありと云此人多く
揚北のわたりて即呂光將軍に十萬の兵を副て則龜
茲國孤使し是像并羅什は呼を奪ひ取ると十箇年を

經て太元十一年丙戌は秦に歸ふ

○呂光改は丙戌は秦に歸ふとて去年乙酉歲に東晋
乃將軍姚萇が苻堅に討る姚萇竟は自立して後秦と
稱し姚秦長安を都して年号と白翟と號し同二年丙
戌は呂光將軍歸朝とて是も君已は亡りては是も号し孤
大安と行ふは行よりは是十二年を経る東晋の第九乃
帝安帝降安二年戌の年の後秦の姚萇が子姚興弘始三
年戌戌はわたり夏五月は呂光も又姚興が子姚興弘
即梅檀の陽像并に羅什は呼と得て長安に歸ふ又
十四年を経る東晋の安帝義熙七年辛亥に即姚興弘
始十六年辛亥也此年八月廿日羅什入滅と同十八年癸丑

姚興（こうせい）崩（ひろ）と其子姚泓（こうこう）位（た）立（た）日廿年乙卯（きののとう）ハ彼吳像（わがぞう）と
 得（え）く後十八年と経（た）り此年劉宋（りゅうそう）高祖（こうそ）いま劉裕（りゅうよ）中
 尸（し）也（や）内兵（ないへい）孤（こ）拳（けん）くびく長安（ちやうあん）を破（やぶ）り姚泓（こうこう）を擄（らぶ）りて出（い）り
 得（え）像（ぞう）を得（え）く餽（く）る車（くるま）に手（て）也（や）ちりて江南（かうなん）よりふ劉
 裕（りゅうよ）大（おほ）喜（よろこ）ていり昔國（むかしくに）に於（お）て人の國（くに）を破（やぶ）り人（ひと）れ智（ち）と香（かう）と
 人（ひと）れ財（さい）を掠（ら）り人（ひと）れ子（こ）孤（こ）擄（ら）りて貴（たか）し如（ごと）く此聖像（このせいぞう）なりと
 出（い）りふ國（くに）の寶（たから）なりとてすむりら竜光寺（りゅうこうじ）に安置（あんじ）と彼竜
 光寺（りゅうこうじ）本（もと）名（な）い青園寺（せいえんじ）とい道生法師（だうせいほふし）出（い）のち（ち）く涅槃經（ねはんぎやう）と
 儀（ぎ）也（や）一（ひと）時（とき）竜感得（りゅうかんとく）一（ひと）本（もと）く德園（とくえん）で少（すく）く改（か）り竜光寺（りゅうこうじ）とて
 彼聖像（そのせいぞう）感得（かんとく）せりふ來（き）六十年（むじゅうねん）を經（た）り東晉（とうしん）十二の帝恭
 帝（こうてい）元熙二年（げんしに）庚申（かうしん）の歲劉裕（りゅうよ）東晉（とうしん）滅（め）して位（た）り立（た）て

劉宋（りゅうそう）の高祖（こうそ）皇帝（てい）の孫（まご）一（ひと）年（ねん）号（ごう）と永初（えいしよ）元年（げんねん）と改（か）じ
 〇（まる）う後（のち）より宋齊梁陳（そうせいりやうちん）に上（か）四朝（しじやう）の間（ま）一百七十四年（ひゃくしじゅうよんねん）江南
 の竜光寺（りゅうこうじ）に安置（あんじ）と隋（ずい）の文帝（ぶんてい）開皇九年（かいわうくわねん）己酉（きのづ）此年（このとし）陳
 滅（め）り安（やす）ふ亂（らん）孤（こ）又（また）此年（このとし）を終（は）り者（もの）わり奏（そう）して曰（いは）江南（かうなん）
 異（い）氣（き）の中（なか）と云（い）時（とき）一（ひと）智脫（ちだつ）とい沙門（しゃもん）ありて奏（そう）して曰（いは）江南（かうなん）
 竜光寺（りゅうこうじ）の瑞像（ずいぞう）に氣（き）をとりて仍（なお）て彼聖像（そのせいぞう）と定（じやう）へちりて
 長樂寺（ちやうらくじ）に道場（だうじやう）に安置（あんじ）し後（のち）に隋（ずい）の煬帝（やうてい）の時（とき）より孤（こ）及び（およ）び
 道場（だうじやう）より今（いま）の開元寺（かいげんじ）是（こゝ）なり又（また）沙門（しゃもん）位（た）力（りき）といふ僧（そう）わり
 衆（しゆ）人を勸（すす）めて飛閣（ひかく）を造（つく）り彼像（そのぞう）を移（うつ）りたる也（なり）則（すなは）ち開皇
 十八年（ひやくはちじゅうはちねん）己酉（きのづ）の歲（とし）なり同（どう）二十一年（にじゅういちねん）辛酉（しんしゆ）又（また）惠練（ゑれん）く沙門
 中（ちゆう）を燒（や）身（み）と刻衣鉢（こくいぱつ）を捨（す）りて供養（くやう）するにけりといふ

○孝唐の高祖乃世武徳六年癸未の癸未の癸未の賊李通
 とつ者あり帝初に擡として其の稱と十月八日其の瑞像
 の園を壞て以て宮室を造らざる欲と何の園を何の師
 祭れとくもい我身を焚死とも仰ぎ祈らる其の園
 をて毀滅せし事免せしりて明年に以て其の李
 子通高祖の乃を滅せりて回里て志願のぶく其の園悉く
 ねりて事公得たりま

○唐の分四の則天皇后の分二の主太宗妃弟三乃
 主高宗の継母たり太宗崩御たりし後高宗の妃とる
 まり高宗崩して後天下のまり此故の分四乃主と
 いつり姓の武たりがなり武后とも呼ばる長安年中其

長樂の道場を改て大雲寺とて毎月香油幡花冥蓋
 等供養乃具公備人給分七の主玄宗用之の年癸丑は
 位は立同十八年庚午の歲勅よりて年号と以て寺に額
 して海州の刺史に夏李邕に詔して書して乃用之寺に
 稱と分十七の主玄宗諱は炎極く武惠の主たりたり
 會昌五年乙丑に三災をゆけり一天を脱蠱とて毀
 俗より佛を掃く強とると此の寺ありは瑞像の
 儀然とて瑞像を放り園昏を照破し後其の華夷歸依
 貴賤賤礼する事濁世といふも其の異なりといふ
 以て樓閣を造りて殿堂赫日と摩りて香花舊の必
 礼敬昔より其累代の帝王宗重なりといふなり

○五代の時の唐の莊宗長興三年壬辰の歲、（一）賜崇
 の沙門十明瑞像の紀を仍りて、（二）初隋の用宣九年己酉、
 淮南楊別長樂の道場、（三）移しより長興壬辰に、
 二百四十四箇年と後、（四）次、五代の時の大晋の高祖天福
 年中に大丞相李昱自立て南唐、（五）号に江都に南昇列
 の金陵に建業城、（六）遷しよりて、（七）長先寺小安置、
 て贖礼供養と次、（八）趙宋の太祖乾徳二年甲子に李昱と
 滅して唐の名公止じ、（九）のら東都宋都の梁苑城の大街
 開資寺に永安院、（十）遷すなりて同二代同に主を家皇帝
 初、（十一）禁中の後福殿に安置し、（十二）移しと後、（十三）西化門の外、
 在宗才二乃至今上皇帝一百万緡を捨て、（十四）造家可安宮

あり今、（十五）新に啓聖禪院と号す、（十六）に極し、（十七）なり、（十八）礼教を宗勝で
 計入る、（十九）なり

○抑け梅檀の瑞像、（二十）のけり、（二十一）大日本國小治、（二十二）とて、
 五臺山清涼寺に安置し、（二十三）とて、（二十四）由來と、（二十五）なり、
 人皇六十代因融院の沙字に南都東大寺に沙門あり、
 齋然法橋と名く、（二十六）字三倫と、（二十七）とて、（二十八）名天下に、
 宿願の子細、（二十九）とて、（三十）唐の商人陳仁爽、（三十一）徐仁滿、（三十二）等が帰國、
 毎に便船とて、（三十三）永觀元年癸未八月一日、（三十四）果嶺と、（三十五）解く時、
 趙宗才二の帝、（三十六）在宗、（三十七）皇帝、（三十八）在平興、（三十九）國八年癸未、
 小あ、（四十）なり、（四十一）十月に、（四十二）宣旨と、（四十三）なり、（四十四）淮南楊別、
 寺、（四十五）あり、（四十六）地、（四十七）院、（四十八）なり、（四十九）是、（五十）の別、（五十一）彼、（五十二）寺、（五十三）あり、（五十四）八、（五十五）用、（五十六）之、（五十七）寺、（五十八）に、（五十九）苑、（六十）園

一信り所もなほし事と日本に於て久しく信國て拜見し
 ちんりあかりき然る小但苑園のてりて伴像を海まきん
 うの子細を寺僧より委くわゆる小寺僧等々曰彼瑞像天
 竺より海を渡して後二百餘年乃同所より移り信乃開
 皇九年より己未五代の時の晋の代より三つをいあらんを
 信まき事二百餘回し事とて信乃代の帝王信書り
 若殺志まき事の詞をみく演畫しし家小大丞相李皇と
 ついしあてに都の南界列金陵の建業城に移りより長光
 寺に安んじ趙宋れ左祖乾德年中に信唐の令法と破り
 信り李皇をせ捕て彼瑞像を運り東京に梁苑城にた
 街開き方の永安院に安んじよりて信書り中二のまき宗

皇帝則運り内裏の儀福殿に移り毎日信書り
 信り見國の信信号都にのり拜し事んと信紙せいの信
 叶り信りし事れし事信書り
 ○資然の上は男子盛算は師彼地福院に信てし事の信記
 号并道代奇特の事其信記写して十二月十九日小東に到り
 同廿日に資然等皇帝に觀する明年の雍熙元年甲申
 かり正月中に宮首松若り東の大小の寺院を巡り多あり
 来り奏問して曰彼瑞像を拜見し事んと事風望かりし
 處に張紉首といふ人信り儀福殿に糸入して瑞像拜見乃
 ちんり公をて資然は信盛算は師并に一行人等也三月小
 東に五品公と信信のりを奏問と則公憑と賜り彼山中に

形にやむは方の名迹をを神に巡行して東京に歸りて到る
 皇帝大に育慈が甚深の志に感し信いぬ何れに育慈は
 首張万進とぬく奉國して下さる我身賤といふも不思後
 扶誼を以て瑞像を拜しし事生じ其の中懐かりし
 依りて形いふの具像を摸し刻く日本國に後しより上人
 より下方民に下すまで苦福と信りしんとわがらたけき
 なる亦は皇帝より育慈が懇懇の志を感し思ひて便
 像を円慶の西北門の如く出しとせしめて都宮に置り精舎と
 たり新の啓聖禪院と号し洞法一百万緡を於て佛師の名
 匠法宗とて彼精舎に於て摸し造りし日なり此で東成
 福智田後し妙相瑞像なり事毘首羯磨の作は古佛に少も

方より下すや王位を叙し上下方民渴作し事東海に
 出府系りて宋才二皇右宗皇帝より育慈へ弘海大師の
 号を賜ふ

○宗乃れ其深奇特の事ゆまに彼毘首羯磨天正作
 乃瑞像弘海大師育慈へ甚懇に請告ありて曰我東土の衆
 生弘化度の縁あり形くい汝と共に海を渡りて扶桑國に
 住し群生と利益とす一怪し事なるまことや育慈は
 寤りて奇異の志を以て則希像を運りて香紙に張宗
 が新作の像をたぐるべし祈り古佛は身より西海にまこ
 くと然りしども極後しとさん事なれり此の如くけりり至
 かりと思煩く一夜を専らして祈誓を致し人れとが免

少人未敢效と書けて是と見れば本佛新佛各々の方と
 去給ひぬがら遷りつらとせ給ふれ別人力のぬるあど
 齊代甚深のうまのい玉花是をうまのい玉花とて
 の具候事いぬらびにせし釋尊初祖より歸降の時
 此の像金銀水精乃階なりとて此途にあり給ひし小
 本佛ものあり摩頂授記して未來乃海度鏡蓋と附屬
 したまふに伝約ひのりてい佛のりて三國傳來し
 ゆと末世の衣せと海度し給ふありと肝に先へて
 感涙とらう孫齋法つり信公記し終不風波乃
 形人りなく吾の法し給ふれば日奉新約のりて
 中此佛のりてはとてはとて信く書物集終ふと云ふ

尊しり改りり末代の衣生給う是と傳い給はん

○本宋の雍熙三年丙戌七月九日歸朝の旨公奏聞とて大藏經五千
 部して南無と共々奉納し之障あり人皇二十五代花之院
 寛和二年丙戌七月九日歸朝の旨公奏聞とて大藏經五千
 四十八卷及十六羅漢の法像同持し後やるあり明年は及び
 六十六代一條院承延之年丁亥二月十一日不洛より包ふ人り
 すから左極殿に安置し給うて毎白一升の白飯と供養し
 へり三年を経て大内北野並に甚き安をせ給へり
 て海蔵よりうけしとてまろ其後南無奏聞を経て
 愛宕守護の公以て唐の五基とて准て又よ清原公公之世
 揚像を遷座し給はんて先一室の小堂に造りて安置し給ふ

今の釈迦尊も是なり清原の建武宮院のまじりて是より有然寂
 滅と仰ふ六十七代三條院の清原長和五年丙辰三月二十日
 入滅に後ハ才子盛美のまじりて養國を經く極度の西の書を
 清原寺と名付て天竺の具勢と震旦のふ臺と号せり
 の西の迹ハ土紙唐より西ありて壇と築瑞像の厨子と安を
 一より教よ日本有験の具場と國を叙ハ瑞像なりと
 上二人を始りて中唐人にありて湯神の堂と合く位作の
 頭と傾ふ事ハ此れ其のちりけり
 ○け瑞像本朝ハ四考後國直入の御は傍く清遠留かり安ふ
 何人も知ざる老僧報毎ハ此と同なり地下人足別ぬ人ありて
 不思後のことと云く在事の上未瓜月ハ此僧告と奇瑞有瓜

以今小請要事と早して是あり
 ○人室七十三代堀河院降了ハ盲目の聖一人あり清盲と名く清
 涼寺小坊で日夜法院ハ名号と唱て安告の性生瓜らむ
 ちりふ年核り宿と侵るり何ハ秋よりいしむるを懺悔して
 いん我宿業の深重かり瓜みく一生の同盲目より然りて
 又我宿福甚厚にして此の具地ハ縁を結ハ此瑞像のまじり
 久く坊で法院の名号と唱つる事瓜坊よりある事瑞像を
 久ハ一日成り眼を開き直り多容と礼拜しむる也と
 詞も未及る事盲を久き事眼忽ハ開きむと云り是別
 本多の具繪念伴の奇持ありき欲知過去因則其現在
 果欲知未來果見其現在因少なり令言を乃

あつものたり

○八十年代高倉院の浄行治承元年丁酉の春乃は諸人より愛忠
 の告ありて言く我將西王のゆりしと然る間上下万民躍を
 踏々群集一室震のめりて浄行を怖と惜むる事深
 乃舎れぬ南北の名僧東西の淨侶微妙の伽陀を唱へ持くの
 は施を献て仰願ひ此國より久しく止むと云せ弘利益一修也
 と信ひ弘法一初誓の徳を抽でこれりや後又告ありて美人
 餘りに歎き此の向と仰り浄行とて也其のりも歸りて
 今向の衆生といへり多し拜見しき人と殊り陸奥乃
 弘法とてまことのかり宝物集いしものなり

○八十二代後鳥羽院の浄行建久元年庚戌の年に浄堂圓縁

と武列の慈光寺の住侶上求は師法人をすめて再興と廿八
 年を経て八十四代順徳院の浄行建保五年丁丑市を炎うと
 は阿の梅尾明恵上人夢賤と勸進して造営の功を遂ぐる間う心
 建立と或阿七ヶ月の説法有る不修勢天照右社宮八幡大衆と
 初めなりて大小神祇法天竺林悉く説法の柳に新向ありし淨
 春日大明神毎夜法儀しゆまき由修り其府の神とて内乃
 権現と勸情しやうとなり

○釈迦堂奥陸勸進のる小五十七ヶ月の回車おの名僧かゝるがく
 毎日役付あり其中に仁和寺の靜遍修教ともゆりて又禪林寺の
 大納言の修教ともし平相圓清盛云のる俗の娘大納言教
 盛の息たり小野廣次直流を極めて教養の養あり彼修教の

後世は曰く秋秋より一代の教を以て八相の化儀を示し八万四千
 の法門を説く趣四生れ群衆を度し修するの昔芥の行を修し
 修し一何三千世男のわらわく身命を捨す十方に淨き。擯棄
 せしむる我多の世々番の物にして細伏し教化して今より此
 娑婆世界のなまぬ悉く我子なりとのたまふ世間の父母を
 唯今世一世の身を賜く親を天呼ひ多生利益の恩出離解脱
 の乃と教へ修し眞實の父母なりとの恩世間父母の百千倍
 してたよへさおろし世間の父母の家の焼くるを其子として
 一人をても造良し況んや其の父母の淨者の焼くるを其子の
 一カはくとまきりし中て分るんはして財を投ぐたり親
 法に修し其のさと同の度并舌の法に修して法に修し其のさと

須細して皆社をそ修する僧都も涙をみせて尸をけり此事
 法を道理をいへ面して奉加の志いゆすんは進ぶも九妻の
 習公の持さい家へ婦修いさへ明日あるやん明後日あるやん
 年くおして志い方とも指南する世間の進もるさへおんて
 多くいむけりいば奉加日んとさるんは進ぶも九妻の
 修すべし此尸をけり此貴賤上下男女細素或は衣履脱き
 小袖をぬぎ直垂大口たわ刀多に穿すやで群衆のんを加
 一けさば教の身加より物も少く程よく造営有る
 となり四の取るは月出度には者ありと尸修くゆり
 ○毎年三月十九日存子の淨身法と尸す奉修り其由素
 い安嘉門院と尸しは後高倉院の女五宮八十五代後堀河院

の准母なりき後堀川院の清母は北白河基家卿の女なり
 安嘉門院の母も同ド彼清母は北白河女院とて叔母なりけり
 とも清在生の間とせり若根を以て作給ひて利清條路の砌
 風雨烈く雷電驟して法人の驚落るのゆかりに安嘉門院ハ
 いつとて清持佛堂よのこねりして終つて終つて清母儀の生
 處定て吾不うといはれまほしきと思ふべし七十年の同祥と
 の追若ぬいともゆして伏して寝ては母れ生不ぬ志とをせ
 後とて安嘉ふ歩をばいび多年は幸多し祈誓ありともれん
 むつとも清の清何愛忠の告あり汝の母衆深くして地獄母ハ
 うとも真實の志を以て種々の追福をいともしゆべき
 持して軽く受今ハ地獄を以て高生道とて牛に生れりとも

彼牛をえんとも明日早朝よ安嘉の西より村本弘率て七之
 の牛を長し其中に才四番ありて黄色なる牛あり七之彼則
 汝の母なりとも見給ひて清愛いともいとも若忠のわたりたふお
 くらきともわりの西の門へ出く待給ふもよまれ告のめく黄かり
 牛わり則彼牛をらとも安嘉のめいわたりて寺弘造る彼牛をほ
 るぎをその香草と飼合物を飼と書いり茶よ必兼又告く言
 く今段牛に生れり其宿業と果し業因をほくもてこそ人
 身も受くべしともいふ母を給ふもあとも終回却て羅公幸ぬ
 下但常伴の牛れりて東にけけのき材本を二牛とせ給ひり
 必辭脱を賜下とせ給ひりて東にけけ材本然びりせりり
 彼牛死て葬送の儀あり惟子を以て必兼の清膚を拭る

彼牛の皮と利て帽子と為せたり終は火葬を何ふに事なるといひて
 是香堂一 天に丸墜と傳はれ生の奇蹟と歎けり彼牛の
 牽ける杖本はして西の門を穿るる門の上方の柱の中を穿りて牛
 の骨竈こめられて今に是ありはして佛堂に左敷と法家乃皮
 中てい葉巻と作りて本多の佛厨子の茶も抄りてぬ彼葉巻とい
 われ牛の皮と盡り今に佛おに是あり三月十九日彼牛乃死
 する日かり年久しきと昔佛身披の結縁今に退轉あり
 ○先代武藏守平朝長素時の子孫修理亮河氏の次男茶相換
 守時教は名道宗後最明寺と号し八十七代後醍醐院
 の淳亨寛元四年丙午に降崇徳末朝よりある八十八代後
 深草院の淳亨建長元年己酉はありと平元帥時教巨

福に建長禪寺公多々彼葉巻和為公請て開かぬ初矣
 治建長より以来二十餘年鎌倉の主として四海を帝手握
 て世治り民淳かりきまらぬもを國の守備國司地頭法家
 人いふもけ不當猛惡の者ありて人け多めを押致し人民
 百姓を觀とんとて躬法を巡りて是を國下とて髮を
 剃衣冠深く六十餘別を修りてれ多る方尙尙尙一宮
 通夜ありて佛ありけり少く睡眠多し多る小秋多戸張
 をおあぎとけ厨子をお給へ直に祥となりとせめて
 感嘆の銘り秋を詠む
 菩提の寺後世もきと新しと君もけりも我も忘れ
 中平はとそと、愛いともぬ高番もは倍りて下向せりか

るのみら強者より黄金百枚寄進あり又田島と林等七ヶ
所寺附せられて今にありゆる間毎年二月廿二日西念の日
乃佛事今ふ退轉なりとのたり

○大念佛執行の幸瑞像我報より終り奉り六字六代
一修院の清字永延元年丁亥なりし奉り二百九十二年ぬ
るく九十一代後宇多院の清字弘安二年己卯三月六日
神々皇紀ありて九十一代伏見院れ清字に田覚上人
母勅して遂修善根のあり四衆の業を勸ては金剛院土生の
地藏堂を所布に始りありといふも後儀の大念佛と根奉り
と共いありて番指の群集門前市中をりて今に退轉と
奉りて三月六日神々同十五日結縁と有る田島長

和五年丙辰三月十六日方蓋有十箇日の間大念佛の有る退
く撤と所のかりと意にの一札依り存るも奉り系の系と
小遷り所りまたと十箇年及びて退轉すといふも文明十
年戊戌に再興しての事なりと

○當寺に安んずる君愛柿の舍利之由の奉り皇九十七代後醍
醐院重建武平年中に天下各札ありし内但馬國の住人河越
十郎といふ武士中に入して清堂の内に入りて踏つて奉
る瓜つさる瓜り身りてたの清小指をつき折なりすやい
疎病を清く苦痛逼迫して立敷に死去りゆりぬ仍く彼が
分但馬から移郷ありて終り死にり去行り彼清指と継ぎ
がるに終りの末瓜調りていふも終り所奉りて天宮を愛せり告

ようして天童開山慈覚大師は宣旨をかざる然向法師七の目
 向沉香と稱美し継りたる相送りく詣り其の瑞像の願
 柿を少感得たりと評するべ則柿のさした白色の舍利と名給ふ
 今はいやく合所高き其の美姿より又膠州のりより削肩少これ
 願はとい國師香炉の火は燈結ぶるの以円觀上人より人おりき
 えいん後して乳蜜あるは才一と光あつて教の智の業は
 の善は上人より如く結た久しく山門流傳の風は流り悟悟の悟
 高じてはわす天魔の掌極は墜とと七とに公清法師の善
 を擲高祖大師の具足は歸せんふいと一度名利の徳と
 るく寂冥の苦乃の厭と閉て神の行い西塔北谷の真の
 青毫寺小坊公之りて三衣と荷葉の林のあま守れ一神と

ねたの朝乃風はほを後のが徳不孤必有隣大明不藏之志
 づげつわの五代のむまに國師として三聚淨戒の丈短より法勝
 寺中興開山慈覚和尚も也い上人いまこ山門はねをせしとれ
 彼炉中の香は同給して同也然くして赤梅檀の香い鼻を
 穿つたを末たりとて天王寺と高きと使者をゆく尋ねよ
 妙よ高きより上件の事は返答すたるもその上人不審
 を教し給ひしと也
 ○一百一十代後円融院浄空康曆年中に心寂上人といふ若僧
 あり瑞像の殿中にいまはまを奉祀不審して潜く金籠中に入ると
 ありく佛は淨足と標る急疾病を擲る貴僧がくはて死
 又高き善は仏祐とらる者あり瑞像の内に其の善を誰か
 瑞像記

平公因て平生好むとせしむる處より一百二代禰光
院の寺宇を造り永承二十二年七月十日五日の大地震の府に於て公の
小舟を幸ふ公の目を翳さず守り守り小舟に居る容あり勃
して来れぬと云ふ事ありて教ふに

○同寺宇に南寺の近小洲郷に道長く、此者修りたり
十四名の寺より彼者死して四十九日あり日の来りや
越中れまよふ事有り僧あり法堂の前より一人れ入道し
行合り信く曰某は、後園若中郡法儀の近小洲郷に
尸に取の志を道長く、若かりしを教へて道長は此位
にたぐり教ふるは、信依りて十四名の寺より同施の
は諸人今無量道に墮して飢渴の苦しむるに教へ

此僧を教へ、法儀の教を堂へ教へ給ひ、法儀慈悲憐愍して
て彼堂より三四所衣已れ方よりて小洲の道長が家にて法
身わりて妻子に告ぐ信りて、某が持分十四名あり一名
上米一石宛秋が堂へ奉りて、大佛供と信り百味乃
飲食を調へば、奉りて儀を執りて飢渴の苦患を降く
べし、法儀よ、是れ奉りて被る帷子の袖を解く、彼僧
よ、あてかきけを中へ以て先よりけ信身持の心と信
天性慈悲の信りて、某より直より、某より、彼家より尋
りて、委細に信り、終る妻子ども、佛の帷子の袖に、
各涙をたらし、信り、とて、いかに、ぬく、吊とぞ、たし、其後
小洲の住人、若くは、人より、某より、又道長より

遇けり彼市にけり鐵鬼道を出離とる事と得たりとて多分舎
喜ふに氣をくんで打矢ぬふふあつて十月十五日は鐵吊乃
儀式不儀とかりん

○同法堂に高寺日糸のく事多中付生院よ念佛上
人といひ聖あつた事多孤粒を有り日糸して平天付生格ふ乃
祈松より外より他事更にかう或何多病し下向よりしあの門
あて立ちたがう付生の素懐とてさう後よりはさや四方了算音
樂虚つふ同へて同あな奇形を死いなり

○祐慈仁之年丁亥五月廿六日洛中東約二〇令進て天下勅
礼ふに起る同二年戊子九月七日小幡中あつて色空とて天
竜寺條川寺安幢寺原徳寺西禅寺あめ法刹法塔院大

六十餘所地下の在家三千餘字敷木の乃さあつり高き此二王門
法守社多雲塔五大堂皆灰燼と煙れ中へ柱と衣質は印と
つる僧と不断法経の聖廣見禪師とあ人傍像を昇て中
院の定基寺竹魚の中に遷るまふかの将と事一毛乃如し
此日晩方に大雨束抽のゆ降て條炎早く滅尽と清涼極度乃
兩寺ねも僅よ残まり彼あ人又灵像を昇て舊寺小塔しなりん
とすといふの重さま千鈞の如し世人修りしよく昇奉て安
重とといつり

○慈仁二年九月七日の炎とい丹波勢強賊中に乱入乃何なり堂
舎佛圖并在家ホれ者之劫火の如し二王法守五大を炎も
焚くるとい清涼寺へも數火かるとて既よ老くるけふあ

軍勢の中に白髪より山伏六具指望ありてありては、
 係より久しき信より宗文といふむ信あり彼ら伏し多きは、
 棟よのちうて火を消さむとていふ多きは、
 處しと伏し大さ小懸く大音の音をわけて和信とて消さむとて
 多し汝の命と奪ふべしや大の眼と角とましく叫ぶる向いふと
 ても存命不定ありや思ひて年来親身し親身ふ身命を
 はうせむり信とてまき物をとて定め格をのりて等とて火
 をけし信とてあふ風とてあつて所堂の信がなく強とて
 則ち宗文を信より下とていふ軍勢とて一人となりて多し此由
 徒人し信とていふと奇特の信とてあつて西後當の信とて
 大格親とて信よりくくりや美賊とていふ信とて感とて仍く清

深寺の無相遠人より存在より火焼時我此土安極乃金言
 といふ合さしてありあつて信よりけり彼ら多きは、
 仰の者なり終し此僧は十八歳して大信とてあつたり
 ○一百三代後には園院の清字に惟子頼阿とて桑心者あり十九
 歳より九十歳まで日斎し一期の間惟子一人をのみく夏冬は
 別るし一生持斎の斎なり或何速綿とてあつたりいふは安
 乃苦界より久しく長けて又、益早く松葉信生の信を
 多しく不退の信とて終し人よりとて多しく二宮院の信とて
 櫻の枝も信を付て類を信とていふ本の枝とてあつたり
 中を多くあつて又大樞川の千鳥が瀬とて入水とてあつたり
 瀬と折る進美のあつたりけりあつて執事よりあつたり信生の

河州未未々々順次の所をてて終るはそつて金佛をてらげ
 たりけり去而河州を來して文明年中に性生孤蓬らぬ事言
 ふ日我付生ぬ後七ヶ日の間性生院乃三昧のねは本の手にあざし
 也下是れを同供具をてて調へて七ヶ日彼本の手にあざしと
 鳥獸もあざしと思候たりし事とせり

○秋のつゆあひて不形は奉徳浦の雪廣見已あて一万八千
 餘部後讀經乃功終るぬゆふ愈に乃我は秋のつゆあひて遷し
 たりけりも無甲斐とて大井川へ入水しけりも桂川せりも
 煩かたりけりゆふ脚船を寄るぬゆふぬぬ人いふと問ふり
 廣見答て曰ふはゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
 水の上へまはるる招きゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

傳の同秋のつゆあひて不形は奉徳浦の雪廣見已あて一万八千
 餘部後讀經乃功終るぬゆふ愈に乃我は秋のつゆあひて遷し
 たりけりも無甲斐とて大井川へ入水しけりも桂川せりも
 煩かたりけりゆふ脚船を寄るぬゆふぬぬ人いふと問ふり
 廣見答て曰ふはゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
 水の上へまはるる招きゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

○延仁二年は子九月廿日小揚像と先北野の神祠の側
 安部守房の或夕淨衣被るるむ人廣見が戸を叩きて告ぐ曰
 今夜賊徒探像と偷んとする衆命を乞ふと用公をてゆふと云
 捨て去ぬ廣見大に驚て將軍家の侍一族一色殿乃士卒と雇
 て守備しける其翌日法人風使志けり昨夜賊徒多高橋
 神明の林乃間集會して心遣けり此佛の棟樑なり是を
 破りて奪んぬ其價をたるといふ又一人いふ但此佛をた

和泉の場々若狭の小湊より安をせいで定て法人と名依して群
 集とて結ぶに併おれ教法莫々の玉得るんと多しと淨論
 して法力二人是恒の長より若新らしてあはれり去程小庵見の
 きのふれ告知せり多人を同悦謝の礼とほくんとて尋けふつお
 く其人は金曰これ必を聖廟の淨告衆とて感涙とぞたじ
 ける刹彼法に人共よ命を乞へける事奇異のありさすや
 ○文治二年庚寅の春淨教寺の長老と名えりく廣見と名えり
 尸且あるに本堂に瑞像と遷り身と欲を淨公中必何と問
 長老不可及吳侯不奉遷と名えりく之の拂曉て門を叩くは
 八さるの一多敷より使者公のて彼吳侯と佛教よ安をせりすと
 かり給る同淨教寺小遷り身とて公のありけり文治九年

丁酉冬十一月天下靜極して此吳侯も又舊寺のくつとて
 くのなり奉る淨光破換の刻に淨教寺の長老立誓上人よ
 羨悲れ若方て具此鳥と乃かふぐとてまはる細立仁有
 けるふり付れ修造奉る鳥と此結縁むけり此羨悲乃告
 かりて大住生公をたけり
 ○此瑞像と拜せざり仁神昔より今に至りて都鄙亦是
 多し名字公書とに及ぶと明れば素の中にも常に志れわり而
 何れ北野より一人は沙弥ありて拜とせりさふより聞及けり
 ○同淨光當ち此の門前より一人は尼とあり法人異名してこの神
 とも名付又い地尼ともいり奉る公拜とて此素ありといふに
 て歳二十の所より法る若らして七十又歳に及るまで毎夜物に

世の時法を感惑しけりて彼妙公具愛と蒙る如來告て
 のありけ汝過去の悪因ありけりて如來公拜恩を蒙る
 ことありけりて多生歩を致し罪障懺悔のありけり
 高貴なるふより人より以後の真容を拜とせしむるの奇
 蹟といふ日本朝の如來東に性寺より一人の信者ありけり舍利
 とありけり感得とせしむる其具告じありけりて聖日一
 人の僧身ありけりけり汝は舍利を授ふとせしむる如來の
 告念はかり愚僧久しく西朝の舍利を甚惜く存せしめ如來
 の淨告堅固なる間子細ありけりて今も存せしむる如來の
 淨舍利の丈さ小豆粒程ありて銚色なりけり汝はかく授ふ
 歸にけり彼尼公眞骨を得る而もわが汝まのありけり

梅檀の容を拜見しけりて其始の罪障定て消滅と見
 と隨喜乃涙千萬なりけりて其後いよいよ信心堅
 固して念佛を修すは乃八十歳ありて往生の事候と
 是にけり往生の刻いば身を虚空にふるまひて目を度瑞相
 を致しけり彼尼公遺言に曰此淨舍利は如來より賜りけり
 又奉るけり厨子へ返し入身とせしむる其義とて如來を
 うしむるの如く愛忠の告ありて後藏の奥藏白毫乃師
 阿彌陀佛は傳ふるものあり彼人も當りふれり其功あり
 多うき其功不空とせしむる如斯具告ありけり

釋迦如來梅檀瑞像記終

右記者畧舉本緣起之要領耳
尚存增補追刻之志云尔

五臺山清凉寺

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '五臺山', '清凉寺', and '緣起']

イ
176
52

